



毛利氏は関ヶ原の戦いに敗れ、かろうじて存続を許されたものの、中国地方の領地112万石から、周防長門二国の37万石に落とされた。当然移封に際しては、それまでの家臣を全て雇用することは叶わず、多くの家臣は離散した。それでも長州に移ることを望んだ家臣の一部は、帰農して大庄屋や本陣を務めるというケースが多くあったと言われている。椿家もその一つである。

「徳佐村史」には「本陣、脇本陣は

地方の村役人や富農、富商の家屋をこれに充て、屋敷地を免租として名字帯刀その他の恩典が与えられた」とある。椿家は徳佐村の本陣で「当主・椿勘右工門、但家構本門大手後ヶ輪杉垣、土蔵長屋後二有。本家桁行九間半梁行五間半、屋根惣茅葺、云々」とあり、852坪というという壮大な邸宅を構えていた。四境戦争時には洋式銃80丁分の資金提供もしたという。ただし、現存するのは、イラストに描いた門のみである。記録によれば、六代藩主毛利宗弘が寛保二年(1742)に、また宝暦六年(1742)に七代藩主毛利重就がここに宿泊している。話は少しそれるが、七代藩主毛利重就が登場したので、この機会に是非触れておくことにする。毛利重就は長州藩の支藩である長府藩の第十子だったが、兄の早世、他家への養子が重なって、まず長府藩主になる。その後本藩の六代宗広が35歳で亡くなり、嗣子がいなかったため、重就が本藩藩主となった。何となく井伊直弼を思い出させるが、重就に関して触れておかねばならないのは、彼の行った政治改革である。彼は藩主となるや検地を実施する。そこから新たな財源、約4万石を得た。この資金を「撫育金」と言い、それを元に「撫育制度」を設けたのである。この制度は、藩の本会計とは完全に切り離れたもので、赤字の補填などには決して充当せず、様々な産業育成に活用した。その政策は「防長三白政策」とも呼ばれた。即ち、干拓事業による米の増収、三田尻(防府)を中心とする製塩業、そして和紙、港湾の整備、北前船に関係する金融業、倉庫業などである。この産業育成政策によって蓄積された資金が約1世紀後の長州藩の危機を救うことになる。つまり、この資金は、第二次長州征討、その後の戊辰戦争時の長州藩の武装強化に惜しみなく使用されたのである。幕末これらの産業からの収益も含めれば、石高は優に100万石を越えていたとも言われている。重就の始めた撫育制度は、明治維新の源流と言って良いのではないか。(2024.4.20記)




**イラストでたどる石州街道** 25 **本陣椿家門**

徳佐に入ると街道の右手に椿家の門が見えてくる。椿家は代々大庄屋や庄屋に名を連ねた名門で、初代市左衛門は慶長十六年(1611)に庄屋に任命されている。庄屋の住居は藩主や幕府巡検使など高位の者が宿泊する本陣に指定されるのが常だった。藩主が代替わりすると新藩主は江戸よりお国入りして領内巡視を行ったが、津和野藩との境・野坂峠を訪れた後、ここを定宿としていた。本陣近くには、幕府や藩の掟、禁令を公布する高札場も設けてあった。縦横約2.5m×8mの板に板書き屋根が付けられ、そこには田畑を荒らすな、親には孝行を尽くせ、夫婦兄弟仲良くせよ、キリスト教を禁する、毒薬や偽薬の販売禁止する、などと書かれていた。

文イラスト  
古谷眞之助